慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	王勃の詩について
Sub Title	On Wang po's poetry
Author	今原, 和正(Imahara, Kazumasa)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.43, (1982. 12) ,p.74- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塚越敏教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00430001-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

王勃の詩について

今原和正

I

王勃（六四八―六七五）は、唐初なお斉梁体の余韻をとどめる宮廷詩壇の外にあって不遇の士人の悲哀をうたい、楊炯、盧照鄰、駱賓王らとともに、次の盛唐文学の招来を準備したとして評価されている。

このいわゆる〈初唐の四傑〉は、いずれも文才に恵まれながら思うような官途を遂げることができず、おおむね短命で不幸な生涯を送ったという点では相い似るが、後世の詩派のように共通の文学理念を以て結ばれた集団ではなく、その詩風もまた必ずしも一様ではない。それゆえ、〈四傑〉の名に抱括されて為された王勃評には、往々にして王勃の文学の特色が見落とされたり、また逆に、王勃の文学にないものが付け加えられたりするということが見うけられる。明の王世貞は「盧駱王楊、号して四傑と為す。詞旨の華麗なるは固より陳隋の遺に縁るも、骨気の翩翩として意象の老境なるは、超然として之に勝る」というが、王勃には、後述する如く、自己の不遇に芽ばえる哀感に洞察を加えてそれを人間存在の根元的な悲哀にまで昇華し、そうして巨大化した複雑な感情をそれに拮抗し得るほどの筆力を以て表現するといった作品は残っていない。盧照鄰の「釈疾文」や駱賓王の「在獄詠蟬」のように痛切な悲哀をうたった作品は見当たらないのである。王勃の詩に気骨ありとし、それをそのまま盛唐詩に直結させようとする説を間々見受けるが、それ

にはすこぶる疑問をおぼえる。

また、四傑は詩以外に、賦、序、書、碑など、いわゆる〈文〉のジャンルでもその才能を発揮しており、就中、王勃は当時すでに「常人の及ぶ所に非ず」との評価を得ている。王勃の〈文〉才が、そして、他に抜きんでているばかりでなく、実に彼の詩才に遠く勝っていることは、王勃の集をひもとく者にとって一目して了然たることがらであろう。それ故、王勃の高才と高評とをそのまま詩にあてはめて理解することは避けねばならないのである。杜甫の詩の中に、王勃に言及したものが四つある。

楊王盧駱当時体　軽薄為文哂未休　楊王盧駱当時の体　軽薄文を為って哂うて未だ休まず（杜詩詳注巻十一戯為六絶句其二）

縦使盧王操翰墨　劣於漢魏近風騒　縦い盧王をして翰墨を操ること漢魏の風騒に近きより劣らしむるも（同三）

挙天悲富駱　近代惜盧王　天を挙げて富駱を悲しみ　近代盧王を惜しむ（同巻八寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史参）

学並盧王敏　書偕褚薛能　学は盧王の敏に並び　書は褚薛の能に偕う（同巻十九寄劉峽州伯華使君）

いずれも〈四傑〉の〈文〉才、すなわち〈文〉の中にちりばめられた学識のほとばしりを称賛したものであって、これを以て杜甫が王勃の詩を評価していたと言うことはできない。

盛唐以後の詩の充実を李杜韓白に見るとするならば、彼等はいずれも士太夫としての志を根底に据えた文学の流れを意識しており、その先達としての敬意を、遠くは漢魏の諸人や陶淵明に、また近くは初唐の陳子昂に払っているのであるが、四傑に対しては、文辞の華美と出処進退の軽率さとから、そうした文学史の中に高く位置づけることはしていな

い。そして文辞の華美と出処進退の軽率さという点では王勃は他の三人よりもいちぢるしいのである。では王勃は、李杜韓白の意識の中で、言い換えれば唐詩がより大きなものへと流れを転ずる過程において、ただ単に「綺麗にして珍とするに足らず」と一蹴されてしまうだけのものにすぎないのであったのであろうか。本稿では、創作の手本となる作品とは別に創作に刺激を与える作品のあることを念頭に置きつつ、王勃の詩を、そこにうたわれた悲哀を中心にして見ていこうと思う。

II

中国の詩には悲哀をうたったものにすぐれた作品が多い。その理由についてここで詳しく述べることはできないが、あるいは、信仰によって現世の苦悩から逃れるということをしなかった中国の知識人が、現実を見つめることによってかえって人生は痛疾哀苦から逃れられないという認識を得、開きなおってこれを甘受する一方、詩歌にその悲哀をうたって心をなぐさめたからであろうかと思われる。いずれにせよ、個人の感情を表出する文学の最初の段階で屈原や宋玉が自らの不遇をうたい、知識人が個々の胸中を定型詩に託すことを始めて間もない時期に曹植や阮籍が自身の悲哀や時代の不幸をうたったことは、先行する文学作品から語彙や発想を借りることの多い中国の詩にひとつの決定的な方向を与えたものであると言ってもよかろう。そして時代を経るにしたがって、詩人達は自己の内部に芽ばえる悲哀の情を明確に意識してとらえたり、ときには類型化したりさえしていくのである。不遇の嘆き、望郷の念、別離の情、哀悼の意、さらには戦乱の悲惨さや人生の無常が引き起こす悲哀などを、詩人達は過去の文学によって保証されたものとして自覚したのである。

では王勃は自らの中にどのような悲哀を見出していたのか。以下、その生涯に沿って見ていくこととする。

麟徳元年（六六四）、十五才の王勃は中書令の職にあった劉祥道に自薦の書状（上劉右相書）を上呈して神童の評を得、天下に一躍その名を知らしめた後、十七才で幽素科の挙に及第して朝散郎を拝し、高宗の第六子沛王賢のもとにおいていよいよ文名をほしいままにしていたのであるが、たまたま当時諸王の間に流行していた闘鶏のあそびのために戯れに檄文を作ったところ、諸王同士の反目を恐れる高宗の不興を買い、総章二年（六六九）二十才のおりに、沛王のもとへの出府をさしとめられたうえに官職を免ぜられることとなってしまったのである。自らの文才を顕示することにつとめていた王勃にとって冷水を浴びせかけられたような事件ではあったが、それほど重大な過失とは思えないし、また、自他ともに認める才能の持ち主である王勃にしてみれば、必ずしも前途に絶望するということはなかったようである。彼はかかる処置に対する不平を鳴らしながら、不愉快な長安を後にして蜀への旅に出た。

天地不仁にして造化に力無し。僕に授くるに幽憂孤憤の性を以てし、僕に禀くるに耿介不平の気を以てす。頓に山岳を忘れ、唐堯の朝に坎坷す。傲りて煙霞を想い、聖明の代に顛頓す。情知るべし。（夏日諸公見尋訪詩序）

長安にいづらくなった王勃にとって、いわば冷却期間をもうけるような旅であったが、同時に見聞をひろめておのれの文才に磨きをかけるのにも絶好の機会であった。その際、蜀への道を選んだ理由はさだかではないが、あるいは、不遇の司馬相如が蜀の地で暮らすうちに武帝の理解を得て官に復することができたという故事にならおうとしたのかも知れない。ともあれ、長安から渭水に沿って西に向かい、始平、散関を経たあと南下して蜀の棧道を通って剣閣を越え、綿州、梓州、漢州、彭州と旅を続ける王勃の胸中には、相変らず免官への不満がくすぶりつづけていたようである。当

然、異郷を旅する身には客愁も起こるのであるが、いつか復官を遂げて長安に帰ろうと思う者にとって、それはさほど深刻なものではあるまい。他郷に集う人々を前にして王勃は免官への不満を鎖静するかのように、隠棲のそぶりを見せ、異郷での思いを述べる。

下官して人間に独り傲り、海内に徒を少く。志は王侯に屈せず、身は塵俗を絶たず。……昔東呉に往くに、己に梁鴻の志有り。今西蜀に来るに、張載の懐無きにあらず。……離亭北に望めば、煙霞故国の悲しみを生ず。別館南に開けば、風雨他郷の思いを積む。（綿州北亭羣公宴序）

吾の生を有つや二十載なり。雅に城闕を厭い、酷だ江海を嗜む。（遊山廟序）

この時期の王勃は無官の身ではあったが、その文才はますます輝きを増してきており、周囲には彼の文章を求めて集まる人々が少なからずいたようである。また蜀中の寺廟のために書いた碑文もいくつか残っていて、衣食の途が完全にはふさがっていなかったことを思わせるのである。しかしながら、彼ほどの文才もなく、官界での栄達も思うにまかせぬような友人の旅出ちを見送るときには、自らの将来に対する一抹の不安を伴って、彼の胸中にも不遇の悲哀が起こったようである。

僕の区区たる、常に人の百年は猶お一瞬の如しと以為えり。……自ら良友を置きて窮路に相い依る。……他郷に怨みて白露寒く、故人去りて青山迥かなり。其れ悲しからずや。（秋夜於綿州羣官席別薛昇華序）

このような悲哀は、その後現実のものとして彼自身におそいかかってくるのであるが、いまは蜀地での活発な文学活

動が功を奏したのか、咸亨三年（六七二）、彼はひとまず長安へ帰る機会を得、翌年には虢州参軍に補せられることとなった。復官ののぞみを果たしたのであるが、しかし王勃はここでもまた軽率な行動をとって過失をおかすのである。すなわち、ある事件をおこした官奴を、事が発覚するのを恐れて殺害してしまったのである。運よく大赦にあって死罪はまぬがれたものの、王勃はふたたびその官職を解かれることとなった。前回とはちがって、このたびの離官は致命的なものである。もはやいくら華美を極める文を書いたとて、それが復職への道を開いてくれる可能性は薄くなったし、また、自らの窮状をうったえる詩文を作ってみたところで、同情を買うことはあってもそれが現実に作用することはあまり期待できなくなった。楊炯はこの時期の王勃について「著撰の志、此れより多きを居む」と言っている。恐らくは学術的な著作によって再び世に出ようと思ったのであろうが、それも功を奏さなかったようである。失意の王勃は、黄河を北にのぼって同州を経て故郷の龍門に帰ったあと、父の任地の交趾へ向けて長い不安な旅に出る。

下官して詩書拓落として羽翮摧頽す。朝廷に立錐の処無く、丘園に括囊の所有り。山中に事業して暫く漁樵に到らん。天下に棲遅して少く城闕に留らん。忽ち萍水に逢い、雲雨に対して以て無聊たり。倍〻窮途に切にして、形骸を撫して何をか託さん。（冬日羈游汾陰送韋少府入洛序）

黄河をくだり、南下して楚州、江寧、常州、越州と、かつては梁鴻の志を抱いて遊んだ江南の地を不遇の悲哀を抱いて旅する王勃の心中には、浮き草のように出会ってはすぐに別れる知友との送別の悲しみが、また郷愁とともに沸き起こったようである。

昌亭に旅食し、下走の窮愁を悲しむ。山曲に淹留し、羣公の宴喜に属す。……故人手を握り、新知目に満つ。……嗟乎、此の歓再びし難し。殷懃なり北海の筵。相い見るは何れの時ぞ。惆悵たり南溟の路。（秋日楚州郝司戸宅餞崔使

君序）

嗟乎、九江にて別れを為す。帝里雲端に隔たる。五嶺方に踰ゆ。交州天際に在り。方厳として舳を去り、且く窮途に対す。玉露下りて蒼山空し。他郷に悲しみて故人に別る。（江寧呉少府宅餞宴序）

咽水に横たわりて東西し、愁雲を緒ねて南北す。況んや窮途に泣くに自首に於いてするをや。自首臨別の秋に非ず。岐路に嗟くに他郷に於いてす。他郷豈に送帰の地ならんや。（越州永興李明府宅送蕭三還斉州序）

また、有名な滕王閣詩序もこの時期呉越から交趾へ向かう途中の作であろうと思われるが、高閣に登って広大な天地を見渡した王勃は、世に容れられないまま異郷をさまよう心細さに加えて、人間という存在の小ささをも実感したようである。

天高く地迥かにして宇宙の窮まり無きを覚ゆ。興尽き悲しみ来りて盈虚の数有るを知る。……関山越え難し。誰か悲しまん失路の人。萍水相い逢う。尽く是れ他郷の客。……嗟乎、時運斉しからず。命途舛り多し。（滕王閣詩序）

この後、王勃は広東に足をのばしたあと、海を渡る途中で水中に没して死んだという。父親に会うこともできず、はなはだ悲惨な結末であるが、そこに至るまでの三十年に満たない生涯もすこぶる不幸なものであると言わねばなるまい。王勃自身、そうした不幸を、不遇の嘆き、望郷の念、別離の情、そして人間の卑小さを感じたことから起こる寂寥感としてとらえていたようであるが、表現された悲哀は志ずしも現実の不幸の大きさに比例してはいない。不遇を嘆くのに窮途の語を多用するが、具体的な状況や心情を語ることはしない。前途の不安な旅を続ける王勃にとって望郷の思いは渇するがごときものであったろうが、類型的な表現や対句の巧みさが切実な悲哀を薄めてしまっている。また、不遇の士が他郷で出会ったときに起こる感情も、決して浮き草ということばが連想させるようなはかなさだけではなかっ

たであろう。宴席の序が公の場で書かれたものであるという条件をさしひいても、王勃には自己の悲哀を適確にあるいは増幅させて表現するという意識や才能ははなはだ希薄だったように思える。それは詩においても同じことが言えるのである。

百年懐土望　千里倦遊情　　百年懐土の望み　千里倦遊の情
高低尋戍道　遠近聴泉声　　高低戍道を尋ね　遠近泉声を聴く
磵葉纔分色　山花不弁名　　磵葉纔(わずか)に色を分かち　山花名を弁(わきま)えず
羈心何処尽　風急暮猨清　　羈心何れの処にか尽(つ)く　風急に暮猨清し（麻平晩行）

「百年」とは一生涯のこと。また、「千里」とは旅程のはるかなこと。ともに生涯旅を続けねばならない境遇を言うことばとして王勃が好んで用いるものである。この詩は蜀の地で作られたものであるが、次に交趾へ向かう途中の作を引いてみよう。

客心懸隴路　遊子倦江干　　客心隴路に懸かり　遊子江干に倦む
槿豊朝砌静　篠密夜牕寒　　槿豊かにして朝砌静かに　篠密にして夜牕寒し
琴声銷別恨　風景駐離歓　　琴声別恨を銷(け)し　風景離歓を駐(とど)む
寧竟山川遠　悠悠旅思難　　寧(いずく)んぞ山川の遠きを竟(お)えん　悠悠として旅思難し（羈遊餞別）

いずれも第一聯で客愁を述べ、第二聯、第三聯で情景を述べ、第四聯でふたたび客愁を述べるという手法が共通するだけでなく、そこにうたわれたしみじみとした旅情も、ほとんど差がないように思える。蜀での客愁と江南での客愁と

では、状況の変化からみて雲泥の差があると思えるのだが、王勃はそれらを適切に表現することをしない。

送送多窮路　遑遑独問津　送り送りて窮路多し　遑遑として独り津を問う

悲涼千里道　悽断百年身　悲涼千里の道　悽断す百年の身

心事同漂泊　生涯共苦辛　心事同に漂泊　生涯共に苦辛

無論去与住　俱是夢中人　去ると住まるとに論ずるなく　俱に是れ夢中の人（別薛華）

この詩は蜀の地にあってやはり官界での栄達に不安を抱きつつ旅に出る知友を見送ったもので、「自分はこれまで何度か友の旅立ちを見送ったが、その多くは人生に行き詰った者だった。君もいまひとりで不安に満ちた気持で職を探さねばならない。悲しみにあふれた心には千里の行く手はいかにも荒涼としたものに思える。せいぜい長生きしても百年にすぎない人生を諸事に心を苦しめるうちに終えるのだ。私も君も心に思う事は漂泊の旅。二人とも生涯は辛いものだ。行く者も留まる者も、別れた後は夢の中で会うだけの身だ」というのがその大意。旅立つ友の姿に自らの不遇の悲哀を見出してうたった詩であるが、次にやはり江南での作を引こう。

下駅窮交日　昌亭旅食年　下駅窮交の日　昌亭旅食の年

相知何用早　懐抱即依然　相知何ぞ早きことを用いん　懐抱即ち依然たり

流楼低晩照　郷路隔風煙　浦楼晩照低れ　郷路風煙を隔つ

去去如何道　長安在日辺　去り去れ如何でか道わん　長安日辺に在り（白下駅餞唐少府）

白下駅すなわち今の南京で長安に旅立つ友を送った詩であるが、自らの窮状については第一聯において魏斉や韓信の不遇の時代の故事を用いて述べるだけである。これを前出の「別薛華」とくらべると、詩にうたわれた悲哀が必ずしも

現実の悲哀を反映させたものではないということがうかがえるのである。

盛唐以後、詩人達は急速にその表現技術を向上させていったのであるが、その中に、王勃の不幸な生涯についてあらかじめ知識を持ち、なおかつ彼が自覚した悲哀についてともに官界に生きるものとしての共感を抱く者がいたとしたら、その詩人にとって王勃の詩はどこかしらもどかしいものに感じられなかったであろうか。そして、王勃がうたわなかった、あるいはうたえなかった悲哀の高まりを、自らの持つ技量を駆使してうたってみようという意欲を、果して彼等は持たなかったであろうか。

王勃の詩はそうした詩人達に共感と反発という形の刺激を与えて盛唐以後の充実を導き出したのではないかというのが、本稿の結論とするところなのであるが、次に絶句形式の作品をとりあげて、その点についていますこし触れてみたいと思う。

Ⅲ

客心千里倦　春事一朝帰
還傷北園裏　重見落花飛

客心千里に倦み　春事一朝にして帰る
還た傷む北園の裏に　重ねて落花の飛ぶを見るを（羈春）

客念紛無極　春涙倍成行
今朝花樹下　不覚恋年光

客念紛として極まり無く　春涙倍ます行を成す
今朝花樹の下　覚えず年光を恋う（春遊）

これらの詩はいずれも、いつどこで作られたものなのかさだかではないが、客愁を主調としつつも、推移する時間へのおののきや一度しかない人生への愛惜が読む者の心によく伝わって、王勃の詩の中でも特に注目されるものである。

絶句の原型は晋宋のころすでに民歌としてあらわれ、斉梁のころには文人達も盛んにとりあげたが、それらは庾信などのいくつかの例を除いて、おおむね歌謡の域を出ないものであった。唐詩の大きな成果のひとつとして、この最も短い詩型に人生の最も大きなテーマをうたい込んだということがあげられるが、王勃のこれらの詩はその最も早い例と見做してもよいのではないかと思う。気骨という点では駱賓王の「易水送別」などにはもとより及ぶべくもないが、春情をうたう閨怨詩と紙一重のところで士人の悲哀をうたうこれらの詩は、むしろ先ほど述べたことと同じ理由で詩人達の創作意欲をかきたてたのではないだろうか。そしてそれは、王勃が意図的に試みたことではないかと思えるのである。以下、しばらくそのことを論ずるために、王勃の「春思賦」の序を引くこととする。

咸亨二年、余春秋二十有二。巴蜀に旅寓し、歳序に浮遊す。明時に殷憂し、聖代に坎壈す。九隴県の令、河東の柳太易は英達の君子なり。僕、遊に従う。胸懐を高談し、頗る憤懣を洩らす。時に春なり。風光依然たり。古人云う、風景殊らざるも目を挙ぐれば山河の異れる有り、と。其れ悲しからずや。僕不才にして耿介の士なり。竊かに宇宙独用の心を禀け、天地不平の気を受く。弱植一介、千里に窮途すといえども、未だ嘗て情を公侯は下さず、色を流俗に屈せず。凛然として金石もて自ら匹うも、猶お情を春に忘るる能わず。則ち春の及ぼす所遠く、春の感ぜしむる所深きを知る。此れ僕の窮賤を撫して光陰を惜しみ、功名を懐いて歳月を悲しむ所以なり。豈に徒らに幽宮狭路、陌上桑間のみならんや、屈平言える有り、目千里を極むれば春心を傷ましむ、と。因りて春思賦を作る。

官職を解かれた不満が、今を盛りと傲るがごとき春景色と落拓たる我が身とを対比させることによって不遇の士人の悲哀に転じ、その心情を春事に託してうたおうというのである。

中国の詩は、情と景の一致を保つことを大きな特色とし、士人の悲哀は多く秋景に融和されてうたわれ、女子の怨情

は多く春望に触発されてうたわれる。「女は陽気に感じて男を思う」などというこじつけを持ち出すまでもなく、咲きほこる花の色にふと容貌のおとろえを感じ、鳴きかわす鳥の声にしみじみと独居のさみしさを思うことは、もとより感情の自然な発露であったろう。また、宋玉が「九弁」を作って以来、士人達は、散り落ちる木の葉や空を行く鴈やすだく虫の音に不遇や羈旅や孤独の織りなす悲哀を導き出すことを常としたのである。このように見てくると、王勃が士人の悲哀を春思としてうたったことは、はなはだ興味深いことがらであるように思える。もちろん、そうした試みは王勃以前にもすでに為されており、その最も早い例としては、王勃自身も引く屈原の作をあげることができよう。

湛湛江水兮上有楓　湛湛たる江水　上に楓有り
目極千里兮傷春心　目千里を極めれば春心を傷ましむ
魂兮帰来　哀江南　魂よ帰り来れ、江南哀し（楚辞・招魂）

千里のはてを眺めてやって傷む春心とは一体何であったのか、この作品の特殊性を考慮すると軽々しく言うのをはばかられるのであるが、屈原の不遇を知る士人にとっては、これを失意の旅のさなかの望郷の念ととらえることが可能であったろう。そしてここから、春はふたたびめぐり来たのに自分はまだ時を得ないまま異郷の旅を続けているという悲哀を主調とした作品が、いくつか生み出されるのである。

游客芳春林　春芳傷客心　游客芳春の林　春芳客心を傷ましむ
……　……
傷哉客遊士　憂思一何深　傷むかな客遊の士　憂思一(いつ)に何ぞ深し
目感随気草　耳悲詠時禽　目は気に随う草に感じ　耳は時を詠ずる禽を悲しむ

寤寐多遠念　緬然若飛沈　　寤寐して多く遠きを念い　緬然として飛沈するが若し
願託帰風響　寄言遺所欽　　願わくは帰風の響きに託し　言を寄せて欽ぶ所に遺らん（晋・陸機・悲哉行）

この「悲哉行」は『楽府詩集』巻六十二に収められるが、その題下の注に次のようにいう。

『歌録』曰わく、「悲哉行」は魏の明帝造る、と。『楽府解題』曰わく、陸機云う、「遊客芳春の林」と。謝恵連云う、「羈人淑節に感ず」と。皆、客遊して物に感じ、憂思して作れるを言うなり、と。

このことから「悲哉行」が客遊憂思の作であることがわかるのであるが、さらにつけ加えるならば、同書に収められた陸機以下、謝霊運、謝恵連、沈約の六朝期の四人の「悲哉行」はいずれも春にうたわれたものだということである。このうち謝恵連の作は、陸機の作の最終聯がどこかしら男女相思の作のおもかげをとどめているのに対し、この世における真の理解者を求めるということまでうたっている点で注目される。

羈人感淑節　縁感欲回轍　　羈人淑節に感じ　感ずるに縁りて轍を回さんと欲す。
我行詎幾時　華実驟舒結　　我が行詎ぞ幾時ぞ　華実驟ゝ舒結す
覩実情有悲　瞻華意無悅　　実を覩れば情悲しむ有り　華を瞻るも意悅ぶ無し
覧物懐同志　如何復乖別　　物を覧て同志を懐う　如何んぞ復た乖別せる
翩翩翔禽羅　関関鳴鳥列　　翩翩たり翔禽の羅　関関たり鳴鳥の列
翔鳴常疇偶　所歎独乖絶　　翔鳴常に疇偶　歎ずる所独り乖絶す

こうした感慨は、言うまでもなく魏の阮籍によって印象的にうたわれたものであるが、その詠懐詩の中にも、「招魂」の影響下に生まれたものがある。

湛湛長江水　上有楓樹林
皐蘭被径路　青驪逝駸駸
遠望令人悲　春気感我心
三楚多秀士　朝雲進荒淫
朱華振芬芳　高蔡相追尋
一爲黄雀哀　涙下誰能禁

湛湛たる長江の水　上に楓樹の林有り
皐蘭径路に被り　青驪逝きて駸駸たり
遠望すれば人をして悲しましむ　春気我が心を感ぜしむ
三楚秀士多く　朝雲荒淫を進む
朱華芬芳を振わし　高蔡相い追尋す
一とたび黄雀の為に哀しむ　涙下りて誰か能く禁ぜん（詠懐其十三）

永遠の時の流れを思わせる長江の水と、人世の短促を実感させる馬の疾駆。そしてその短い時間の中で為される人間のいとなみのなんと空しいことか。こうした、詠懐詩八十二首の其調ともいえる殷憂がここでもうたわれているのである。阮籍の詠懐詩には魏の曹植の影響が認められるが、その曹植にも、士人の悲哀をうたった春思の作がある。

端坐苦愁思　攬衣起西游
樹木発春華　清池激長流
中有孤鴛鴦　哀鳴求匹儔
我願執此鳥　惜哉無軽舟
欲帰忘故道　顧望但懐愁
悲風鳴我側　羲和逝不留
重陰潤万物　何懼沢不周
誰令君多念　自使懐百憂

端坐して愁思に苦しみ　衣を攬りて起ちて西に游ぶ
樹木春華発き　清池長流激す
中に孤なる鴛鴦有り　哀鳴して匹儔を求む
我此の鳥を執えんと願うも　惜しいかな軽舟なし
帰らんと欲して故道を忘れ　顧み望みて但だ愁を懐く
悲風は我が側に鳴り　羲和逝きて留まらず
重陰万物を潤さば　何ぞ沢の周ねからざるを懼れん
誰か君をして念い多からしめ　自ら百憂を懐かしむる（贈王粲）

このほかでは、魏の嵇康の「贈秀才入軍其十二」が、四言詩ではあるが、黄鳥の鳴きかわす声に真の知友のいない孤独感を喚起されたことをうたい、また、晋の張華の「答何邵其三」が、やはりともに春景をめでる親友のいないことをうたっているのが、男女の情をうたう春思の詩から一歩出たものとしてあげることができよう。

このように、魏晋のころには春景に導き出された士人の憂愁をうたう詩が、その数は決して多くはないが、すでに存在していたのである。その後、宋斉梁と時代を下るにしたがって、「悲哉行」のように客愁を主調とした作品が次第にふえてくる。そうした例としては、宋の鮑照の「春羈」「送盛侍郎餞候亭」「行薬至城東橋」「擬行路難其十三」、斉の謝朓の「和何議曹郊遊二首」「晩登三山還望京邑」「春思」梁の沈約の「春思」、何遜の「春夕早泊和劉諮議落日望水」「春暮喜酬袁戸曹苦雨」、王僧孺の「春日寄郷友」をあげることができるが、その詩人も作品も、やはり多いとは言えない。

こうしたことが定着してくるのは隋に入ってからで、例としては陳子良の「於塞北春日思帰」、孫万寿の「早発揚州還望郷邑」「答楊世子」「遠戍江南寄京邑親友」、柳顧言の「春歌」、薛道衡の「人日思帰」、盧思道の「春夕経行留侯墓」、楊素の「贈薛播州其十二其十三」、「山斎独坐贈薛内史二首」などをあげることができる。絶対数の少ない隋詩にあってこれだけの作品が残されていることは、やはり注目すべきことがらであろう。すなわち、春望に触発された士人の悲哀をうたうという興味ある試みそのものは、実は前代の流行を受けつぐものだったのである。

では、王勃のこれらの詩の新しさはどこにあるのかと言えば、ひとつには絶句形式を用いているということと、いまひとつは、春景に対して心中の悲哀がなめらかに導き出されているということである。人は蕭条たる秋の風景を前にしたときには、心中の悲哀をそのまま吐露することができる。「悲しいかな、秋の気を為すや」ということばには、人は

何の注釈も介在させずに、自然の感情として共感できるのである。ところが、花は咲き鳥は鳴く春に対しては、人は「それにひきかえ我が身は」という意識を持たないかぎり、「悲しいかな春の気を為すや」とうたうことは自然ではない。女性の春情をうたう詩も、また士人の悲哀をうたう右にあげた諸作品も、いずれもそうした意識を持つものである。唯一の例外としては次に引く陸機の詩があるくらいである。

節運同可悲　莫若春気甚　節運同に悲しむべきも　春気の甚だしきに若くは莫し
和風未及燠　遺涼清且凛　和風未だ燠に及ばざるに　遺涼清くして且つ凛し（春詠）

だがこの詩は、余韻を残しているというよりもむしろ舌足らずの感があり、あるいは後半が欠落したものではないかと思えるのである。

それに対して王勃は、咲きほこる花をさながら散りゆく落葉のように見たてて悲哀を導き出しているのである。もちろん、春がふたたびめぐり来るはなやかな季節であり、悲哀をうたう詩人が二度と帰り来ぬ時間を不遇のうちに過ごすかぎり、「それにひきかえ我が身は」という意識は決して消え去るものではないが、王勃の場合、六朝人に比べて、その意識をことさら表面に出すことはしていないということなのである。言い換えれば、そうした手続きをとらなくても春の悲哀はうたえるという可能性を示したものだと言えよう。盛唐以後の詩人が季節の制約を越えて悲哀をうたうことができるようになったのも、こうした王勃の試みが刺激を与えたからだと思う。いま、その一例として、李賀の詩を引こう。

日暖自蕭條　花悲北郭騒　日は暖かにして自ら蕭條　花は悲しむ北郭騒
榆穿萊子眼　柳断舞児腰　榆は穿つ萊子の眼　柳は断ゆ舞児の腰

上幕迎神燕　飛絲送百労　　幕を上げて　神燕を迎え　飛絲百労を送る
胡琴今日恨　急語向檀槽　　胡琴今日の恨み　急語檀槽に向う（感春）

Ⅳ

王勃が童子のころから身につけていた文学的素養は、斉梁体、すなわち当時において最ももてはやされたスタイルであった。そのスタイルに包まれた王勃の心情は、だがしかし、決して外見どおりの美や平静さを保ってはいられなかった。そのあやうさが当時の人々の眼には新鮮にうつったのであろう。が、もてはやされたスタイルはやがて見向きもされなくなる。貴族とは無縁の階層の詩人が多く輩出した初盛唐間にあって、このスタイルが見棄てられる時期は意外に早く来た。気骨ある文学と生き方を目指すこれらの詩人達にとって王勃は決して手本とはなり得なかった。だが、ともに官界に生きるものとして、その境遇はひそかに同情に価するものであったろうし、その心情は十分に共感し得るものであったろう。共感と反発。新しい創造を為すうえに不可欠な要素をもって、王勃は次代の詩人のために、個人の情感の表白という、これまで宮廷詩によって閉ざされてしまっていた領域をふたたび開いたのである。その新しく開けた創造的領域の上に陳子昂が現われて復古を提唱し、以後の進取の気慨に富む詩人は多く陳子昂を称えたのである。が、諸手をあげて王勃を賛美する声は唐人からは聞こえない。

詩人間の影響関係を論ずる場合、詩人が自らその影響を認める発言を第一の論拠とし、詩語の共通を第二の論拠とする。王勃が盛唐以後の詩に与えた影響を論ずる場合、第一の論拠はすでにこれを得ることは望みうすである。また、王勃の詩が多く六朝詩の語彙をそのまま用いることから成り立っていることを考慮すると、索引類を用いて詩語の共通性

を探る作業をすすめた場合、第二の論拠も空しく王勃の頭上を通り過ぎてゆくおそれがある。

右に挙げた李賀の詩は、そうした困難を越えたところに残る可能性を示すものとして引いた。杜甫を経て李賀に至る王勃の影響については、いずれ稿を改めたい。